

CLC からしだね書店便り

2026 March **3**
no.63

今月のご案内

- ① 連載「焚き火牧師とノスタルジック・パラドックス・パレス」
第三回 文：大頭真一
- ② 読書感想本 『養生訓』
- ③ ドキュメンタリー番組 『AI の不都合な真実』 を視聴して
- ④ 第7回トークライブ+ボランティアさんによる朗読のお知らせ
「見えなくなって見えてきた世界」 松永 信也さん
- ⑤ CLCからしだね地下古書部から

CLCからしだね書店では…

- ① キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
- ② お洒落 でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④ コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。ドリンクを片手に、本をお楽しみください。
- ⑤ 古書のコーナーもあります。ほりだしものあります。
- ⑥ 読書会や著者を招いての講演会など、人と人とが出会い、つながる「対話」の場を提供します。

お知らせ

からしだね館3階で表千家講師による茶道教室をひらいています。毎月第1~3金曜日、どうぞ一度のぞきにきてください、お気軽に。お問合せ、見学などは **080-3695-2142** 水野までお願い致します。

CLC
INTERNATIONAL

CLC からしだね書店 & コffee トライアングル

営業時間 11:00-17:00
定休日 日曜日と年末年始（※祝日も営業）
毎月第3木曜日は書店のみ営業

(前回のあらすじ)
ノスタルジック・パラドックス・パレスでクニハルさんにヘアカットをしてもらいながらパウロ研究の新潮流を語る焚き火牧師。その新潮流は、パウロの時代のユダヤ教を見直すことから始まった。

クニハルさんに顔をあたつてもらつてなつぱりしたほくの前に、ふるふるすると震えるゼリーと麦茶がでた。ゼリーをスプーンで大きくすくつて、口に入れてから、ぼくは切り出す。「new perspective on Paul (NPA:パウロへの新しい視点)のみなさんは、その言いながらぼくが思い浮かべていたのは、にこやかなE.P.サンダースや、メガネが目立つJ.D.G.ダン、そしてひげのN.T.ライトなどだ。「ユダヤ教もまた、恵みの宗教だと言います。」ぼくは、クニハルさんの顔をうかがった。そこに嫌悪や拒絶の表情がありはしないかと思つて。けれどもクニハルさんの目はいつも同じ、深い理解の色をたたえている。安心して、ぼくは続ける。「パウロの時代のユダヤ教の本質には、悔い改めと罪

あれはその契約のことですな。」と励ます。「さうなんですか。神との関係、契約に入れられた民は、神の恵みに応答したいと思えます。ところが、人は罪に傾きやすい。応答するべきでしかないが、それは罪、すなわち愛に足りない言葉や思い、行いに陥るのです。」クニハルさんは唸る。「まじか!」「何をいふはかりぼくは力む。「けれども、けれども、神は恵み深い。あらかじめ人が罪を犯した場合に備えて、悔い改めと神殿での祭儀によって、人が神との関係、契約ごとくまわるべき道を設けているのです。律法、つまり、神と共に歩く歩き方のうちに。」クニハルさんはうなずく。「なんと。」分かつてもらえたこと、ぼくは安堵の息を吐く。「E.P.サンダースはこれを covenantal nomism (契約維持の律法性)と名付けました。」

クニハルさんは微笑んだ。「thou, 先生はNPAのみなさんに共感しておられるのですな。」と。ぼくも微笑む。「だいたい。」イギリスのマンチェスターのレンガ作りの図書館でサンダースのPaul and Palestinian Judaismを手にとつたときの衝撃は忘れられません。もう25年も前のことですが、「少し感傷にふけつたぼくを

第三回 「ノスタルジック・パレス」 焚き火牧師

山口希生著「ユダヤ人も異邦人もなくパウロ研究の新潮流」へのオマージュとして。



又、大頭真一

の救いがあるのです。つまり、ユダヤ人は、一方的に神に選ばれて、神の民となりました。神との関係に入れられたんです。「ぼくの心は燃えてきた。」それはいつもぼくが、まず、出エジプト、そして、シナイ山、と語る通りです。つまり、よい民でもすべれた民でもないユダヤ人が、そのままエジプトの奴隷から救い出され、そして、その後、シナイ山で律法を受け取りました。だから律法を守ることは救いのための条件ではあり得ません。「クニハルさんの実に適切なあいつちは「承知しております。」神学を語るときにいつも不安になるのは、相手の思考が追隨してきているかどうか。だ。英語では「With me?」と言つが、よい聴き手はその問いを発せません。こちらが「With me?」と訊きたくなるさうしかり0.5秒前に、あいつちではけましてくれるのだ。

勇気を得たぼくは続ける。「さうして神の恵みによつて始まった神と人との関係を、聖書では契約と呼びます。契約というと相互に義務を負うイメージがありますが、聖書の契約は片務的です。神が一方的に与えるのです。」ここでもクニハルさんは「旧約聖書、新約聖書の約の字として邦訳されている。高いけど。」

ぼくはつたない英語力で懸命にこの本にへらいつき、そのときなにかがストーンと腹におちた。旧約聖書の神と新約聖書の神が同じ神であるなら、当然その人格(性格)は一貫しているはずだし、一貫しているのだ。このことはまた、今までぼくが教会で聞かされてきたこととすべてが正しいわけではない、という気づきになった。船団から離れることの不安はあったけれども、それよりも見たことのない大きな世界へのワクワクに衝き動かされた、ぼくは漕ぎ出した。遠くに見えるサンダースたちの舟の尾灯を追つて。38歳の秋のことだ。(つづく)

おおすしんいす

1960年神戸市生まれ。英国マンチェスターのナザレン・セオロジカル・カレッジ(BA, MA)と関西聖書神学校で学ぶ。日本イエス・キリスト教団香登教会伝道師・副牧師を経て、現在、京都府の京都信愛教会と天授ヶ丘教会と明野キリスト教会の牧師、関西聖書神学校講師。焚き火塾代表。ドリームパーティー発起人。



など、ほほえましいものもあります。目を閉じてつくねんと座ったまま何もせず、思い出したように歯を力チカチ鳴らす老人の姿を想像すると、なんとなく和やかな気持ちになります。

江戸時代の儒学者で本草学者(博物学者)の貝原益軒は、83歳の時(1713年)に、健康的な生活法を説いた『養生訓』という本を書きました。この本は当時一般に愛読されていたそうです。ここに書かれている個々の健康法が、今日の医学や栄養学に照らしてどこまで正確であるのかは分かりませんが、その点を差し引いて読めば、色々な意味で面白く読める本です。(以下、引用は『養生訓・和俗童子訓』(岩波文庫)より。)

たとえは、

身体は日々少しづつ労働すべし。久しく安坐すべからず。

毎日飯後に、必ず庭園の内、数百歩しづかに歩行すべし。雨

中には室屋の内を、幾度も徐行すべし。(巻第一、総論上、31頁)

朝食、肥濃の物ならば、晩食は必(す)淡薄に宜し。晩

食、豊腴ならば、明朝の食はかろくすべし。(巻第四、飲食

下、83頁)

など、現代的な常識からもうなすける指摘がたくさんなされています。他方で、

牙齒はしばしばたくへし、歯をかたくし、虫はまず。(巻

第五、五官、105頁)

年四十以上は、事なき時は、つねに目をひしぎて宜し。

要事なくば、開くへからず。(巻第五、五官、106頁)。

支配する関係として見るような、近代的な心身観とは異なった見方を持つていたことが分かります。

人身は至りて貴とくおもくして、天下四海にもかへがた

き物にあらずや。然るにこれを養ふ術をしらず、慾を

恣にして、身を亡ぼし命をつしなふ事、愚なる至り也。

生命と私慾との軽重をよくおもはかりて、日々に一日を

慎しみ、私慾の危をおそる事、深き淵にのぞむが如く

薄き氷をふむが如くならば、命ながくして、ついに破るな

るべし。(巻第一、総論上、24・25頁)

身体は「天下四海にもかへがたき」ほどに重いもので、それをわがままな心(「慾」)から守らなければならぬと言います。こ

こでは身体よりもむしろ心の方が疑わしく、信用できないものと捉えられています。心が信用できないからこそ、その危険から目をそらさず、「薄き氷をふむが如く」慎重に心とつきあいつつ日々を過ごさなければならぬのです。そのため、益軒にとって人の健康を害する最大の原因は、驕りや慢心といった、心の自由な動きを許すものなのです。これは、端的には以下のような「自信をもつてはいけぬ」という教えに繋がります。自信を持ち、心を信頼することによって、心が増長してしまっからず。

養生の道はたの(待)むを戒しむ。わが身のつよきをたのみ

わかきをたのみ、病の少(す)こ(い)ゆるをたのみ。是皆

わざはひの本也。(巻第二、総論下、46頁)

ね入らんとする時、口を下にかたぶけて、ふすべからず。ねぶりて後よたれ出てあしし。(巻第五、五官、102・103頁)

これなどは、「そりやそうだ」と頷くことしかできません。

豆腐には毒あり、気をふさぐ。(巻第四、飲食下、85頁)

四十歳以後は、早くめがねをかけて、眼力を養ふべし。(巻第五、五官、108頁)

こうした、当時の文化や常識との隔たりを感じさせる記述もあり、これはこれで面白いです。当時の豆腐がどんなものだったのかはわかりませんが、現代では豆腐に「毒」があると思う人はほとんどいないでしょう。眼鏡に期待する役割も、当時と今とは若干異なっていたのかもしれない。

以上のような記述からは、当時の庶民の生活感覚というかもの見方のようなものがうかがい知れて面白いのですが、それだけでは『養生訓』の古典としての価値の説明にはなりません。実際この本には、単なる歴史的な資料としての価値以上のものが含まれているように思われます。つまり、今読んでもその内容が私たちの生き方や考え方に反省を迫るような部分があるのです。例えば以下の文章からは、益軒が精神と身体を二分し、前者が後者を

現代の健康法やダイエットの多くが、「心によって身体を制御する」という発想を前提にしていますが、益軒にとってこの考え方は樂觀的過ぎます。恐れ制御すべきはむしろ心の方で、その暴走・思いがりを防ぐことが、身体を間接的に保護することになるのです。凡そ養生の道は、内慾をこらゆるを以て本とす(26頁)

この見方からすれば、「一念発起してダイエットを始めたものの、三日も続かなかった。やつぱり自分は弱いんだ」と嘆く必要はありませんし、「どついたらモチベーションが続くんだろう」と悩むのは無意味です。反対に「一か月も続いた！なんて私は自己管理能力が高いんだ！」と喜ぶのも危険です。益軒に言わせれば、心が自分の思い通りにならないのは当たり前だし、たまたまうまくいっても、その自信がかえって心を増長させてしまいます。

したがって、心によって身体を制御するのではなく、むしろ身体を守る具体的な行動を通して心を手なすけ、その力を弱める方向で考えるべきなのです。

その関係を転倒させ、「強い心こそが身体を制御する主体だと考えることから、様々な苦しみが生じることになります。例えば、依存症治療の専門家である松本俊彦氏は、薬物依存症者の多くが「強さ」へのあこがれを持っており、アルコールや薬物を自分のコントロール下に置くことで「強い自分」になろうとしているといえます。そしてそのような傾向に拍車をかけるのが、周囲の人々がかかる「しっかりとしろ」「もっと意志を強く持て」「強い性格になれ」といった激励の言葉なのです(『薬物依存症』ちくま新書、198頁)。そういった言葉を真に受けた依存症者は、心の「強

「さ」を周囲に示すために、以下のような武勇伝を作ろうと試みては失敗し、さらに自己嫌悪を増していきました。

だからこそ、アルコール依存症患者はわざわざ飲み会に出かけ、「今日は最初から最後までウーロン茶ですぞす」などと息巻ぎ、自分の強さを試そうとするのです。しかしその結果、ウーロン茶は途中でいつの間にかウーロン・ハイに変わってしまっ、友人たちに支えられ、泥酔状態で帰宅するはめになります。『薬物依存症』199頁

松本氏は、「回復に強さはいらぬ。弱さは決して恥ずかしいことではない。自分の弱点を熟知し、危険な状況をうまく避け、弱さを補う賢さにこそ価値がある。『薬物依存症』200頁」と言います。益軒であれば、この逆説をさらに進めて、「回復に心の強さは有害だ」と言いかもしれません。なぜなら、益軒にとって心の強さへの信頼（＝「恃み」）は心を制御不能（＝「ほしいまま」）にする危険なものだからです。わがままで強い心への依存（＝「恃み」）を強めれば、それによって振り回されるのは必然です。

「心の強さによる身体のコントロール」を放棄する益軒のこの考え方の裏には、「身体はそもそも自分のものではない」という思想があります。

人の身は父母を本とし、天地を初とす。天地父母のめぐみをつけて生れ、又養はれたるわが身なれば、わが私の物にあらず。天地のみたまもの（御賜物）、父母の残せる身なれば、つつしんでよく養ひて、そこなひやがらず、天年を長くたも

つべし。〔巻第一、総論上 24頁〕

人の元気は、もとは天地の万物を生ずる気なり。是人身の根本なり。人、此氣にあらざれば生ぜず。生じて後は、飲食、衣服、居処の外物の助によりて、元氣養はれて命をたもつ。飲食、衣服、居処の類も、亦、天地の生ずる所なり。生るも養はるるも、皆天地父母の恩なり。〔巻第一、総論上 27・28頁〕

もし身体が自分のものであるならば、それを自分の思いのままに支配しようとしてもよいでしょう。しかしそれが他から受けとったものであるなら、それを勝手に管理したりコントロールすべきではなく、むしろ心の働きからの有害な影響を少なくするという消極的な関わり方をすべきということになります。

身体に対する信頼と心に対する不信、そしてそれを支える「みたまもの」としての身体観が、益軒の説く健康術を支えています。この思想的基盤があるからこそ、「凡そ養生の道は、内慾をこらゆるを以て本とす」という一節が単なる精神論にとどまらない奥行のある言葉となり、「飲食をよまきほどにして過ぎず」といった個々のアドバイスが、単なるハウツー的な健康法にとどまらない、「生き方の術」としての深みを持つことになります。

このように、『養生訓』は、「健康」という私たちの生活にとつて最も身近なテーマを通して、「自分」というものの常識的な捉え方を顧み、自分の身体との関わり方を考え直すきっかけを与えてくれます。その意味で、やはり古典と呼ばれるにふさわしい本だと思えます。【書店員G】

『AIの不都合な真実』を視聴して

店長 坂崎 恵

「AIの不都合な真実」というドキュメンタリー番組をご覧になった方は、いるでしょうか？2025年にフランスで制作され、NHKのBSでも放映されました。

私にとってそれは、まったく衝撃的な内容でした。正直に言います。

私は「AI」がなんの略称か？と問われても答えられなかったし、どういう仕組みで成り立っているのかも知らなかったし、もっと言うところ、そもそもAIって、何なのか？ほとんどよく知りませんでした。ただ、なんとなくAIに対して直感的な不安を覚えつつ、検索エンジンを使えば無料で提供されるAIからの情報を、いつの間にか使ってしまうって自分にやや後ろめたさを感じ、そしてその後ろめたさを感じていること自体に「時代遅れっぽい私」という卑屈めいた劣等感もついでくるし、もう、何がなんだかわからないままに、「どの程度までAIを仕事に取り入れるべきなんだろう？」などと、わかつたようなわからないような知ったかぶりをしてきました。

私と同じようなちょっと恥ずかしい知ったかぶりの人のために（そうではない人には「今さら何を…?」という話で恐縮ですが）、基本

的なことを、フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』から抜粋してみました。

【AI (artificial intelligence 人口知能)】

『人工知能とは何か』という問いに対する答えは、単純ではない。人工知能の専門家の間でも、大きな議論があり、それだけで1冊の本となってしまうほど、見解の異なるものである。そのような中で、共通する部分を引き出して、「一言でまとめると、『人間と同じ知的作業をする機械を工学的に実現する技術』といえるだろう。(一般社団法人人口知能学会の記事『教養としてのAI』より)

【概史】

1950年代から始まった初期の人工知能は、人間がルールを与える「探索と推論」(第1次ブーム)と「知識表現」(第2次ブーム)が中心だったが限界に至り、1980年代にはデータから学ぶ「機械学習へ移行。2010年代にはその発展形である「ディープラーニング」(深層学習)が画像認識や囲碁で人間を凌駕し、第3次ブームが生じた。2020年代以降は、文章や画像を自ら創り出す「生成AI」が社会に普及し、これは第4次ブームとも呼ばれ得る。汎用人工知能 (AGI) の実現を目指す研究開発も行われている。

『日本大百科全書(ニッポニカ)』で情報工学者の佐藤理史は次のように説明した

誤解を恐れず平易にいかにえるならば、「これまで人間にしかできなかった知的な行為(認識、推論、言語運用、創造など)を、どのような手順(アルゴリズム)とどのようなデータ(事前情報や知識)を準備すれば、それを機械的に実行できるか」を研究する分野である。

知ったかぶりレベルの私は、すでに「アルゴリズム」などというカタカナ英語が出てきた時点で「????」となってしまうのですが、**汎用人工知能(AI)の実現を自指す研究・開発**という言葉は、後ほどまた出てきますので、頭の隅に置いてくださると、ありがたいです。概史を読んでなるほど…と実感するのは、2020年代の「生成AI」の普及のあたりからで、知ったかぶりレベルの私でさえ、AIを使用することができるようになってしまった…ということなのです。

さて、「AIの不都合な真実」の話に戻ります。AIの何が「不都合」で、どういったぐいの人たちにとって「不都合」だから、どんな「真実」を隠そうとしているのか?という話です。

まず、番組のしよっぱなから、「ええっ」とびっくり。私のAIのイメージが、根底から覆されました。

私のAIのイメージはこうでした。一般の人たち及び専門的な知識を持っている人たちが、発信したり、ほぼ強制的に吸い上げられたりしているインターネット上の情報が寄せ集められて「膨大な情報の海」を作っている。AIは、その「膨大な情報の海」を恐ろしい速度で泳ぎまわり、必要な情報をかき集め、組み合わせ、即座に答えをはじ

き出すことができる。

ところが!です。「AIの不都合な真実」によると、私がイメージしてきた「膨大な情報の海」だけでは、AIは間違った答えを出してしまう、と言うのです。なぜか?それはこの「海」には、ある種の情報が、圧倒的に欠けているからです。しかも、その欠けている情報は、常に更新され続けなければなりません。つまり、誰かがAIに、その情報を与え続けているといつことなのです。

いったい誰が、どうやって?

その答えが、「不都合な真実」です。

答えは単純、そして、あまりにも原始的すぎました。AIを動かすために欠けているある種の情報を、パソコンから入力する「データワーカー」という人たちがいるのです。その数、推定で1億2000万から4億3000万人。「それ今ハヤリの陰謀論ちゃうん?」と斜め上から思った人、いますか?無理もないです。私も一瞬、そう思いましたから。どこに、そんなワーカーがいるの?と思いますよね。少なくとも、身近でそんな仕事してる人の話を聞いたことないですから。

でも、いるのです。

ここで、実際に、データワーカーとして働いている人たちのナマの声が紹介されます。グローバルサウスといわれる、賃金水準が低い、労働者の権利が保障されていない国、南半球の新興国や途上国に暮らす人。ウクライナ難民。フィンランド・ハメーンリンナ女子刑務所内の受刑者。

彼らに共通しているのは、貧困であること。データワーカーとして、劣悪な労働条件で、安く使われていること。詳しい仕事内容や、

労働条件、給与については、雇い主から契約書の守秘義務の項目でぎつく口止めされています。もし守秘義務を守らなかった場合には、とんでもない「罰」を受けることとなります。労働組合に入ることも禁じられています。圧倒的な強者である雇い主、Microsoft、Apple、Alphabet (Google)、Amazon、Meta (Facebook) など西側諸国の巨大IT企業の力の前に、彼らは孤立し、口を閉ざしてひっそり働いています。

データワーカー達は、アノテーションという仕事をしています。情報を分類して整理していくために必要なタグ(キーワードやラベル)をつけていく単純な労働です。

たとえば、道路の画像が次々に彼らのパソコンの画面に出てきます。AIを使って無人運転の車を走らせるには、道路の周囲にある様々な障害物を認識して、安全に走行させなければならず、そのために、膨大な道路上の障害物についての情報が必要になるからです。何が障害物で、何が障害物ではないのか。一つ一つの画像を、彼らの頭で認識して障害物なら「1」障害物でなければ「2」をデータとしてパソコンに打ち込み、必要に応じて注釈を打ち込む、といったような仕事です。

他にも、たとえば、火が燃えている画像をたくさん見せられます。AIが火災を素早く察知して消火活動を行うためには、火災と火災ではない状態の違いをAIに認識させなければなりません。煙が発生している状態なのか、燃焼中なのか、沈火した状態なのか、焚き火をしているだけなのかを選び、その注釈のコメントをつけます。

つまり、それらの判断を認識してデータとして入力するのは、どのま

で行っても人間なのです。人間の助けや介入なしに、AIは正常な判断ができません。そして、そういったデータワーカーの仕事は、先進国の通常の仕事としては、行われていません。労働者の権利が保障されていない国、生活に苦しんでいる層に、その日一日どうにか暮らせる程度のお金が与えられるような仕組みになっています。

火災や道路の画像だけなら、貧しい人達に仕事を与えているのだから、何が悪いの?という話になってしまいますが、それだけではありません。

常軌を逸した暴力、殺人、レイプ、無残な遺体、虐待、中には児童が動物とセックスさせられている現実の動画などもあります。正しい人間の行動なのかどうかの判断、模倣してはいけない行動なのかどうかの判断は、画像を見たデータワーカー達が行っています。時には判断を間違つこともありますが、そんなことより、彼らの精神的なダメージは深刻です。耐え切れずに仕事をやめたあとも、誰にも相談できず、家族や地域との関係が悪化し、精神障害を発症し、アルコールや薬物依存になる人たちもいます。そして、それらの深刻で有害で残虐な画像が振り分けられる先は、データワーカーの中でも、より貧しく、より厳しい社会構造の中で暮らしている人たちなのです。

こうして私たちは、不適切で有害なコンテンツを、ごみ処理され取り除かれた後の、きれいなものだけを受け取って利用しています。

搾取する者と、搾取される者。今、私はどちらの側から、AIを見ているのだろうか?という問いが、痛みを伴って胸に迫ってきます。

(第2回に続く…)

松茸御飯

目が見えなくなるということは、何もできなくなることに近いと思っていた。実際に、見えなくなった頃はたくさん^{うしな}のものを失ったような気がした。自由に外出するという基本的な行動ができないということは、何よりも大変だった。

それによって仕事ができないということが一番^{くや}悔しかった。リハビリを受けて^{はくじょう}白杖で歩けるようになったが、なかなか職業には出会えなかった。少しずつ努力は報われたが、「人並み」とは程遠かった。「人並み」を求めて歩き続けた。「人並み」を目指して歩き回っていた頃、帰宅した玄関に、よくおかずの入った袋がぶら下がっていた。近くで暮らしていた両親が届けてくれたものだった。僕の心には感謝と申し訳なさが同居していた。本来ならこちらが届ける年齢だった。銀行で生活費を下ろした日、たまたまデパートに立ち寄る用事があった。秋が始まったばかりの頃だった。デパート地下では松茸を販売している声が聞こえていた。値段を^{たず}尋ねたら、三万円だった。僕は衝動的に^{しょうどうてき}買ってしまった。自分で食べたいと思ったわけではなかった。デパートを出て、急いで帰宅した。デパートの包装紙をはずして古新聞で包みなおした。実家に向かった。「友達がプレゼントしてくれたんだ。すき焼きに入れたらおいしいらしいよ」僕は嘘をついて両親に渡した。驚いた、うれしそうな親父^{おやじ}の声が、今も忘れられない。数日して、また玄関に袋が下がっていた。松茸御飯だった。松茸がどっさり入っていた。きっと渡したほとんどを、僕に届けてくれたのだろう。僕は泣きながら松茸御飯を食べた。見えない目から、大粒の涙がいくつもこぼれた。僕は僕のままでもいいのかもしれないと、何故か思った。僕は「人並み」をあきらめられるような気がした。

松永信也『あきらめる勇気』より

網膜色素変性症により40代で全盲になった松永信也さん。見えなくなって見えてきた世界があると云います。「弱さ」がもたらす平和な優しさとは。生きる希望はどこから来るか、など、白杖をもってどンドン街に出かけていく松永さんのお話を聞きます。
(松永さんの著書より、ボランティアさんによる朗読も予定。)



『見えなくなって見えてきた世界』

会場

からしだね館 カフェトライアングル
(配信もあり)
京都市山科区勤修寺東出町75 (地下鉄東西線小野駅下車徒歩3分)

講師

松永信也
1957年鹿児島生まれ。
著書に『風になってください』『あきらめる勇気』など。

とき

2026年5月6日(水・祝)
14:00~16:00 (13:00 受付開始)

参加費無料

申し込みは、QRコードで。
お申込締め切り4月末日



第7回トークライブ
松永信也さん
参加申込み

参加形態 ※いずれかに○をしてください

- ・来場
- ・オンライン
- ・アーカイブ配信希望 (後日参加)

お名前 :

ご住所 :

電話番号 :

E-mail :

古書献本のお願!

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとうれしいです。(受付できないものもありますので事前にお知らせください。)

百科事典・辞書・開封済みのCD・DVD・月刊誌・週刊誌、
自伝・教会の記念誌などは受け付けておりません。

【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし(料理、健康、経済等)にかかわる本
- 5 小説(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)
- 6 漫画(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)

(多少書き込み等があっても大丈夫です)

2月の古書の収益は33,380円でした。
【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、書店で働く障がい者の工賃になります】献本くださった方のお名前を書店便りにご紹介させていただきたいと思っております。匿名ご希望の方は、お知らせください。寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。

【本の送り先】

住所: 〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
宛先: CLC からしだね書店 献本係
電話: 075-574-1001 FAX: 075-574-0025
Mail: clc@karashidane.or.jp



【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

【献本感謝】

眞鍋里加様、
宇治福音自由教会高橋牧師
様株式会社ヨベル安田正人様、
樋口昌子様、杉浦孝夫様、藤尾
光彦様

編集を終えて…

◆ 3月7日(土)、JOCSのワーカー岩本直美さんのお話を聴くトークライブを行いました。「活動報告会」というと、組織として何を目的にどんな手段で、どんな事をしているのか?という話に終始しそうですが、岩本さんは違いました。岩本さんが、バングラデシュで出会った子ども達やそのご家族のことを、ていねいに語ってくださいました。あたりまえのことですが、活動のための活動ではなく、現実でそこで生きている人と関わるための働きなんだと、強く思いました。◆ 今回は、5月6日(水)に、松永さんのトークライブを行います。きっとそこでも、人との関わりを通じた、松永さんの働きが語られることと思います。お申し込みをお待ちしています。◆ 「AIの不都合な真実」は、NHKのアーカイブで視聴ができるかと思えば、今は配信されていないようです。残念です。このドキュメンタリーについての私のコメントは、書ききれなかったので、次回に続きます。(店長)

地下古書部から

エホバの証人は各地に王国会館を持っています。JR京都駅、京阪四条駅前でも夏の暑い時にも寒い冬にも立って伝道しています。間違っていないかと声をかけたくります。カルトの特徴で辛い試練に合うとかえって信仰が強くなります。それを利用しているのでしょうか。教会にも訪問に来ます。輸血に対して反対する彼らに、使徒の働き15章から質問します。「血を避けるように言っていますが、それは動物の血であって人間の血ではないのですか?」と尋ねると彼らはきよんとした反応です。そして、最後には長老に聞いてきますと言って帰ります。ギリシャ語の本文から質問しても彼らの使うギリシャ語聖書が正しいと一点張りです。彼らは真面目な人たちです。そんな彼らに何とか伝道したいものです。そのためには知識の武装が必要です。(担当ボランティア:水野)



編集・発行: 社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援B型事業所からしだねワークス
CLC からしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025
書店メール clc@karashidane.or.jp



CLCからしだね書店便りの
バックナンバーはこちらから